

古典の日

八

安積



松尾芭蕉

等窮が宅を出て五里計、楡皮の宿を離れて、あさか山有。道よりちかし。此あたり沼多し。かつみ刈比もや、ちかうなれば、「いづれの草を花かつみとは云ぞ」と、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋人にとひ、かつみくくと尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福嶋に泊る。

奥の細道

あくれば、しのぶもぢぢの石を尋て、忍ぶの里に行。遥山陰の小里に、石半土に埋てあり。里の童の来りてをしへける。「むかしはこの山の上に侍しを、往來の人の麦艸をあらして、この石を試侍るをにくみて、この谷につき落せば、石のおもて下さまにふしたり」と云。さもあるべき事にや。



早苗とる手もとやむかししのぶ摺

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

芭蕉が訪れた時にはほとんど沼はなく田畑が広がっていたという(福島県郡山市) 芭蕉庵ドットコム提供

おくのほそ道

芳賀徹さんとたずねる

昔、戦前戦後の小中学生の頃、上野から東北本線で北上するとき、白河から福島までの間は、急行に乗っていても一番うんざりする時間だった。須賀川、郡山、二本松にはたしかに停車したが、安積という駅はほとんど印象がない。

その安積が芭蕉たちをこんなふうにするほど、万葉以来の有名な歌枕の地であるとは知らなかった。この地には「みちのくのあさかの沼の花がみつみかつ見る人に恋ひやわたらむ」との古今集の歌があり、枕草子の時代には都から陸奥守に左遷された名門不遇の才子、藤原中將(藤原)実方が、端午の日にこの地にはない萬葉の代りに右の歌に「花がみつみを屋根に飾かせよ」とした、という風流の逸話も伝えられている。眞孤ともあやめとも覚つかぬその花がみつみを芭蕉は土地の人に尋ねまわったが、心得る人はなし。安積の沼もいまはおおた田畑と化して行方不明。「沼を尋ね人にとひ、かつみくくと尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ」とはうまい。まるで能舞台の上の旅の僧の姿だ。二本松の先の安達ヶ原でも、わざわざ三里も回り道をして謡曲「黒塚」の鬼婆の棲んだという塚をたずねたのである。

五月一日福島一泊。翌日は阿武隈川を東に渡って、こんどは「しのぶもぢぢの石」の見学。私にとって昔から百人一首の河原左大臣源融の歌「陸奥のしのぶもぢぢり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに」は、枕言葉も意味もよくわからぬ一枚だった。大昔には信天部のこの忍ぶの里の表に布をあて、草の汁を摺りつけて独特の乱れ模様を出したのだという。その巨石がいま谷底に上下逆さまに埋っている理由を里の童が語って聞かせるのも面白い。



今も生活に生きる町 京都

学生時代、「古典の授業は古語辞典片手に、現代からは想像もつけない過去と格闘していた気が

古典と私

します。しかし、昨年の「源氏物語千年紀」以来、「源氏物語」はじめ「方丈記」などを読み直し、多くの方のお話をうかが

京都府知事 山田 啓二 さん



う中、「京都」では現代でもいまだる所にさまざまの意味をもって「古典」

が生活していることに改めて感激を覚えます。人も変わり、景色も変わり、建物も変わりました。

た。それでも「京都」に整っていました。京都では紫式部が、鴨長明がみだであらう「葵祭」が今も皇月の都大路をゆきます。私たちが王朝から続く絵巻に、その情景を現ふものとしてみることも有り様が問われています。私たちが「古典」に込められた先人の知恵と力をより所とし、「京都」から日本人の忘れ物、心の豊かさ、人の優しさを、今一度、顧みていきたいと思います。そう思うので

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

文学ウォーク



十輪寺にある「塩竈の跡」(京都市西京区)

十輪寺あたりを「小塩」というのも、この塩竈に由来し、今でも11月23日には「塩竈清祭」が十輪寺で行われます。伊勢物語のなかに、「その人かたちよりは、心なんまさりたりける」と記されるように、業平は、容姿よりは心美しい女性を愛したようです。大原野に立ち昇る紫の煙に、二条の後は何を思ったことでしょうか。伊勢物語を貫く王朝のみやびは、やがて源氏物語へと引き継がれていくのです。(NPO法人・都草 岩澤ますみ)

かなわぬ恋 大原野に立ち昇る紫の煙

昔、ある所に一人の男がおりました。その男は、なんと帝の女御に上がるお姫さまに恋をしてしまいました。そのお姫さまを背に負うて、玉かともがう、白露きらめく野を逃げたりもしましたが、男の恋は遂げられず、お姫さまは入内し、後に二条の后と呼ばれます。晩年、男は大原野に住まいしましたが、后となったお姫さまが、大原野神社に詣でたとき、男は、塩を焼いて紫の煙を立ち昇らせ、変わらぬ心を伝えたと言います。大原野・灰方から善峯寺に行く途中に、その住居跡と伝える十輪寺があります。その男とは在原業平、伊勢物語の主人公です。